

中古から近世期における極限を表すトテの言語変化

高谷 由貴(東亜大学)

1. はじめに

本発表は、極限を表すトテの言語変化について述べるものである。現代語において「子どもでも知っている」という際に用いられる極限のとりたてとして、デモ(全国)やカテ(西日本)、ダッテ(東日本)といった形式が分布しており(三井2003)、ダッテは「断定の助動詞ダ+助詞トテ」が変化したものであるという見方が複数ある(森脇1995、三井2003)。

このトテの平安時代における意味は「引用」が中心で、極限のとりたてと解される例もあるものの、それらもあくまで引用の一用法であるという立場の研究が多い(小田2015・辻本2017c)。

トテが現代語のとりたて詞ダッテの一部となっていると考えた場合、引用からとりたて詞への移行はいつ、どのように起こったのであろうか。本発表では、トテがいつから極限のとりたてになったのかという問いについて考えたい。

2. 極限を表すトテの位置づけ

極端なものをとりたてて述べる際に、現代で全国的に使用されるのは「でも」「も」「まで」であるとされ、「だって」は東日本を中心に使用されるが(友定2003:261)、「とて」は話し言葉としては使われにくいとされる(森脇1995:14、友定2003:264-265)。

この現代語の「だって」は、あらかじめ該当する候補から除外されている要素Xを、それに該当する候補として付け加える際に使用される(蓮沼:2003)*1。

(1)たのむから自立した生活をしてくれ!おれだってこれからは長期で家を空けることもあるんだぞ!のだめカンタービレ

(1)は「これからは長期で家を空けることもある」に該当する候補として「おれ」が排除されている文脈において、その候補として含まれるべきだと主張している。このような現代語のダッテは、断定の助動詞ダと、トテから変化したという(森脇1995:14、三井2003:125-126)。

トテは中古語において、主に思考・発話の引用を表す形式だとされていた(小田:2015)。

(2)a.のトテが受ける「これまゐらせ給へ」は、大進生昌の発話であり、「生昌が、これを差し上げてくださいと言って、御硯などを御簾の中に差し入れる」という意味で解される。(2)b.のトテは「女である私も試みてみようと思って」と解され、心内語を引用する機能を持つ。

*1(蓮沼:2003)ダッテは、それゆえに、相手に反発を感じさせる効果も見られるという。

- (2) a. 「これまゐらせたまへ」とて、御硯などさしいる。 (枕草子)
b. 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。 (土左日記)

一方、中古語には極限を表すトテもあることが指摘されており、(3)がその用例である(辻本2017c: 6)。極限の意味合いとは、すなわち、日本語記述文法研究会(2009: 87)による「文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を暗示する機能*2」である。(3)は惟光の娘に興味を持った夕霧に対する、娘の兄弟の発話である。男兄弟という、娘の近くに寄せ付ける蓋然性の高い存在も寄せ付けない(したがって当然、君達にも寄せ付けない)といった解釈となろう。

(3) 「いかでかさははべらん。心にまかせてもえ見はべらず。男兄弟とて近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覧ぜさせん」と聞こゆ。(源氏物語 少女)

[父惟光は男兄弟だって娘の近くに寄せ付けないのに、まして、どうして貴公子にお引き合わせしようか]

辻本(2017a~c)は中古語のトテを網羅的に記述したものであり、(3)のような極限を表す用例については、「語句を引用して後続節に繋げる」という引用用法の一種*3に位置づけている。中古語における極限のとりたてについて記述した高山(2003)においても、その体系に含まれる形式として「スラ」「サエ」「ダニ」が挙げられており、トテはとりたての専用形式には含まれない。

本発表も、中古語について、その立場に賛同するものである。なぜならば、後述するように、中古語のトテは解釈において、「とりたて」と「引用」とを截然と区切ることができないからである。とすれば、中古語における引用の一用法が、いつから「極限のとりたて」になったと言えるのであろうか。本発表ではトテの「極限を表す用法」の中世以降の変化を記述したい。

まず次節で、先行研究において極限の解釈を導くとされた例を検討し、その後、中世以降から近世の例について、極限としか解釈できない例と、引用とも極限とも解釈できる例を分けて観察し、極限のとりたての変遷を考えたい。

2.1. 中古語における極限を表すトテ

- (4)a. (5)a. は辻本(2017c)で述べられる「極限を表す用法」*4に当てはまるものと

*2小田(2015)および『日本国語大辞典第二版』では、「だって」と同様の意味で用いられると述べられている。

*3その他の用法として「名目を表す」「事情を表す」「資格を表す」等があるとされる(辻本2017c: 4~7)。

*4辻本(2017c)ではトテの文末については、否定形式や禁止形式が多いが必須ではないとも指摘されている。

して筆者が挙げたものである。中古語において、活用語終止形(4)、または体言相当句(5)に接続し、極限の意味合いで解されるものであり、逆接仮定条件とも解釈できるとされている。

(4)活用語終止形+トテ

- a. 参ることならばこそあらめ、この月ならんからに、いそがしとて欠くべきことかは。
[20-讃岐1110_00002, 27210, この月だからといって、忙しいというわけで、欠いてよいことでしょうか。]
- b. われは、この日ならんからにいそがしとて参らざらんがくちをしさに、出で立つを、一人うけひく人なし。[20-讃岐1110_00002, 25030 私は、この日だからといって、忙しいというわけで参上しないのは、不本意なので、出かけるのだが]

(5)体言相当句+トテ

- a. 内裏にも参らで、つれづれなるに、かの聞きしことをぞ。「その女御の宮とて、のどかには」「かの君こそ、かたちをかしかなれ」[堤中納言物語 20-堤中1055_00001, 250150 その女御の宮だつて、のんびりしてはいられまい]
- b. おはしましし、女宮一所こそ、いとほかなく、うせたまひにしか。いま一所、入道一品宮とて三条におはしましき。うせたまひて十余年にやならせたまひぬらむ。[大鏡 20-大鏡1100_02001, 37840 もう一方は、入道の一品宮と申し上げて、三条にお住まいでした。]

- (6)曖昧な例：ただ今ははかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思ふたまふる(源氏物語 少女)[20-源氏1010_00021, 21950 この私がこうして面倒をみておりますれば、貧しい大学生よと侮り笑う人もまさかおりますまいと存じます]

(4)a. (5)a.を見ると、(4)a.は「忙しいために参上しない」という事態が、成立する確率が高い〔と予想されるがそうすべきでない〕という、事態の成立の確率の高さを表している」と解される。(5)a.は「(帝の寵愛が厚いと自慢している)その女御がのんびりしている」という、成立する確率が高い*1と予想される事態が否定されていると解釈できる。

一方、同じく活用語終止形・体言相当句に接続する(4)b.と(5)b.は、「忙しいというわけで参上しないのは、不本意なので」「入道の一品宮と申し上げて」は引用*6と解釈される。

ただし、体言相当句に付き、後続部に否定形式を含んでいる文であっても、(6)は引用

*1成立する確率の高低について、(小柳2008:15)では中古の極限の「ダニ」の基本的意味は「蓋然性の高いコトが予想に反して存在しない」・「蓋然性の低いコトが予想に反して存在する」のいずれかを表し、比較的話し言葉に近い文体で用いられ(小柳2019:45)、事態の成立の確率について、高確率・低確率という高低どちらかの極を表すという。

*6 「入道一品宮とて三条におはしましき」は、藤田(2000:321)「呼び名を引く引用」であると思われる。

とも極限とも解釈可能である。「大学生」が述語「笑ひ侮る」の〈対象〉であると考えれば「大学生だって侮り笑う人もまさかおりますまい」と読めるが、発話・思考に続いて「笑ひ侮る」という動作が起こったと解釈すれば引用構文（藤田：2000）と解釈し、「大学生と侮り笑う人もまさかおりますまい」と読むこともできる。

同じ活用語終止形・体言相当句に付いていても、極限の意で解される場合と、引用と解される場合とがあり、(6)のように意味解釈に幅のある例もあるため、中古語において「とりたて」のトテを他から截然と区切して立てることは難しい。以上の理由から、調査の際は前接語と述語との関係を見ていく必要がある。

3. 調査の方法・資料

調査に使用した資料*1を示す。

中古：竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

中世前期：今昔物語集、建礼門院右京大夫集、東関紀行、とはずがたり、十訓抄、平家物語

中世後期：天草版伊曾保物語、天草版平家物語、虎明本狂言集

近世：近松・洒落本・人情本（会話のみ）

本発表では、体言相当句*2にトテが接続した例を対象にする。活用語終止形については現在調査中であるため、本発表のデータには含めない。

コーパスで検索して得られたデータに関しては、「中納言」の「インラインタグ」の機能を使用して前接語の情報を得た。「平家物語」については目視で確認を行った。

意味解釈に幅のある例の場合は、底本が小学館『新編日本古典文学全集』である場合はその解釈に依り、引用とも解釈できる際は極限に含めない。調査の目的は、極限の用法を厳密に分類することではなく、そのように解釈できる例であるかを判断することにあるからである。

体言相当句を受けるトテ全体の中で、極限と解釈できる例が占める割合と、時代ごとの用例数を表1にまとめた。中古・中世と比べ、近世期は極限と解釈できる例の割合が高いことが特徴である。いくつかの例を次節に挙げる。

*1 平家物語のみ『日本古典文学大系』（岩波書店）、それ以外は『日本語歴史コーパス』を使用した。

『日本語歴史コーパス』検索キー＝語彙素：「とて」『日本古典文学大系本文データベース』検索キー＝「とて」

*2 体言相当句：名詞，代名詞，名詞的接尾辞に接続している例

表1 極限を表すトテの時代ごとの用例数

時代	体言相当句+トテ		
	極限解釈	全体	比率
中古	35	225	15.6%
中世前期	17	241	7.1%
中世後期	15	124	12.1%
近世	74	163	45.4%

3.1. 中世前期

中世前期の「平家物語」には、体言相当句でも一人称代名詞「我」(7)、二人称代名詞「御邊」(8)、固有名詞、「成経」(9)を受けて極限の解釈を導く例が見られる。

(7) 今は我とてもながらふべしとも不覺 [平家物語, 下, 285今は自分も生き長らえる気がしない]

(8) 若此謀反とげましかば, 御邊とてもおだしうやおはすべきと申せ [平家物語上, 166もしこの謀反を遂行していたら, そなたでも無事安穩でおいでになれようかと申して来い。]

(9) 大納言がきられ候はんにおいては成経とてもかひなき命をいきて何にかはし候べき。 [平家物語上, 168父大納言が切られるというのでは, この成親も生きがいのない命を生きて, なんになりましょう。]

(7)は、「ながらふ」という動作の主語が「我」であり、「他の者」に累加して「我」も生き長らえる気がしないことを表す。(8)は、話者に加えて「御邊」も穏やかで入れまいと述べており、(9)は父に加え自分も生きていても仕方ないという解釈となろう。

中世前期におけるその他の調査資料には人称代名詞・固有名詞を受けて極限の解釈を導く例は見られなかった。

これらの例は、極限の解釈以外の、発話・思考に引き続く状態・動作とは解釈できないと考えられる。(10)と比較して考えよう。

(10) 文範民部卿, 余慶僧正を「貴き僧とて, 人の妻をするよ」といひてけり。僧正, このよし聞きて, たちまちに民部卿のもとへ渡られにけり。[十訓抄 30-十訓1252_0400 5, 190 文範民部卿が, 余慶僧正のことを「貴い僧だということをいいことにして人妻と通じている」と言ったことがあった。]

(10)は「貴き僧」であるのをよいことに「人の妻をする」とも解釈できるが、「貴き僧であっても」「人の妻をする」とも解釈できる。トテに前接する体言相当句である「貴き僧」と、述語の「人の妻をする」との関係性を順接条件としても極限としても読み込めるからである。

一方、(7)は「我」という人称代名詞を、発話・思考の内容と捉えることは文脈上、難しく、極限以外の解釈は導かれにくいと思われる。状態述語が用いられている(8)も同様に、「御邊」を述語の主語として解釈するのが自然であろう。

中世前期にはこのような、極限的用法以外での解釈が難しい人称代名詞・固有名詞を受ける例が見られるが、全体としてのこのような例の割合はそれほど高くない。

3.2. 中世後期

その後、中世後期の資料にも、人称代名詞(11)固有名詞(12)を受けるものが見られるが、これは前述の「平家物語」と同じ場面の例である。

また、(13)「仮令」という仮定条件をあらわす語と共起する用例も見られるようになるが、これも極限以外では解釈できないものとした。

(11)…疎うも有れ、親しゅうも有れ、えこそ申し宥むまじけれ：若しこの謀反遂げられたならば：御辺とても穏しゅうや有らうと申せと、言われたれば[天草版平家物語巻第一・第五，40-天平1592_01005，17420もしこの謀反を遂げられたらあなただって心穏やかでいられようかと申せと言われたので]

(12)命の惜しいも父を今一度見たう存ずる故ぢゃ。成親が切られうずるに於いては、少将とても甲斐無い命生きて何に仕らうぞ？[天草版平家物語巻第一・第五，40-天平1592_01005，25780父親である成親が切られようとしているとあつては，少将だって甲斐ない命を生きて何になるか]

(13)仮令重科を被って遠国へ行く者とても，人一人身に添えぬ事が有るか[天草版平家物語巻第一・第七，40-天平1592_01007，2070罰を負って遠国へ行く者だって，人一人も連れぬ事があるか]

3.3. 近世期

(14)(15)は，人間名詞(14)と人称代名詞(15)を受ける例である。(14)は「町人」が「賤しからず」という形容詞述語の主語として，(15)は「こな様」が「杯を飲む」という動作の動作主と読める。(14)(15)は引用と解釈することはできず，極限と解釈するのが自然である。

(14)オ、出来いた／＼侍とても貴からず。町人とて賤しからず貴い者は此の胸一つ。氣遣せまい伊左衛門が妻子。[夕霧阿波鳴渡，51-近松1707_01002，28200 町人であつても卑しくはない]

(15)…差しければこは珍しいつけざしと，おし戴いて飲んだりけりおたねもよほど酔ひはくる。男の手をしかと取りコレこな様とても，主ある者のつけざしを参るからは罪は同罪何事も沙汰することはなるまいぞと，詰めればいやはや，かゝる迷惑と，飛んで出づるを…[堀川波鼓，51-近松1707_22001，47410 これ，あなた様も夫ある者の口をつけた杯をお飲みになったからには罪は同じ。]

一方，体言相当句に接続している例であっても，前接語「小の虫」が「ころしはせぬ」

という動作の対象と解釈できる(16)は、「小の虫と思って殺しはしない」(引用構文)「小の虫だからといって殺しはしない」(極限解釈)の二通りが可能であるため、極限解釈には含まれない。

(16) 今過急な此中で両方全き工風はつかぬは。差当ての大的虫。小の虫とてころしはせぬ。[明烏後の正夢, 53-人情1823_08008]

4. 前接語について

ここまで、極限を表すトテを時代ごとに見てきた。中古語については、先行研究で示された通り、トテをとりたての体系に含めて考えることは難しい。その理由として、解釈に幅のある例が見られ、引用との区別が困難であることを挙げた。

一方、中世前期に、人称代名詞・固有名詞を受け、極限以外の解釈ができない例が見られはじめる。これらは、前接語がトテに続く述語の主語であると解釈することが自然であり、引用とは解釈しがたいものであった。

ここで、上で見てきた、中古から近世にかけての体言相当句を受ける極限解釈のトテの前接語の内訳*9を確認すると、表2のようにまとめられる。

近世期には、人称代名詞を受ける例の割合が他の時代の資料よりも高いことが表2からわかる。

中古では指示語・固有名詞・人称代名詞を受けることがなく、無生名詞を受けるものが多かったが、中世前期に人称代名詞・固有名詞が、中世後期に指示語を受けるものがそれぞれ見られるようになり、近世期には人称代名詞等の有生名詞に多く使用される。また、この人称代名詞28例のうち、おれ・われ・わしなど一人称が26例を占めた。

表2 極限を表すトテの前接語

時代	有生					無生名詞	指示語	疑問語	合計
	人称代名詞	親族名詞	固有名詞	人間名詞	動物名詞				
中古	0	1	0	12	1	18	0	1	33
中世前期	2	1	1	2	0	10	0	1	17
中世後期	1	0	1	2	0	5	1	5	15
近世	28	5	4	7	0	19	9	2	74

5. おわりに

本発表で指摘したことは以下の通りである。

中古では極限的解釈が可能な例が見られるものの、全体の中ではごく一部で、引用と解釈できる例との区別が難しい状態であった。中世前期の「平家物語」において、極限のみで解釈される、人称代名詞+トテの例が現れたが、依然として引用とも解釈ができる例が多数を占めている状態であった。これは中世後期でも同様である。

体言相当句を受けるトテが、述語との関係上「主語」「動作主」と読む事ができる場合、

*9 前接語の内訳・分類には角田太作(2009, 初版:1991)を参考にした。

極限と解釈されるが、述語「笑ひ侮る」「ころしはせぬ」などの対象として読まれる場合、発話・思考の引用とも解釈されうる。後者の場合は、資料の底本で確認できない場合は、「極限」として計上しない。

以上のように見ていくと、近世期の資料において、それ以外の時代の資料と比較して極限解釈の割合が高く、また、人称代名詞を含む有生名詞の割合も高いことがわかる。

冒頭で設定した「引用のトテがいつ極限とりたて変化したのか」という問いに対しては極限のトテは中世前期にその変化の兆しが見え、近世期に本格的に極限のとりたてへと変化していったと考える。

〈参考文献〉

- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院
- 小柳智一 (2008) 「副助詞研究の可能性」 『日本語文法』 8-2, pp. 3-19.
- 小柳智一 (2019) 「日本語のとりたて表現の歴史」 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 くろしお出版, p. 41-58.
- 高山善行 (2003) 「極限のとりたての歴史的变化」 沼田善子・野田尚史編 『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』 pp. 107-122. くろしお出版
- 辻本桜介 (2017a) 「中古語のトテについて (一)」 『米子工業高等専門学校研究報告』 52, pp. 9-25, 米子工業高等専門学校
- 辻本桜介 (2017b) 「中古語のトテについて (二)」 『米子工業高等専門学校研究報告』 52, pp. 26-43. 米子工業高等専門学校
- 辻本桜介 (2017c) 「中古語のトテについて (三)」 『米子工業高等専門学校研究報告』 52, pp. 44 -58. 米子工業高等専門学校
- 友定賢治 (2003) 「とりたての体系の地理的変異」 『沼田善子・野田尚史編 日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』 くろしお出版, pp. 257-273.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典第二版』 小学館 <https://japanknowledge.com/library/>
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 5』 くろしお出版
- 沼田善子 (2007) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房
- 角田太作 (2009, 初版: 1991) 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (2003) 「取り立て詞「だって」について」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』 (16) pp. 251-268. 姫路獨協大学外国語学部
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院
- 三井はるみ (2003) 「極限のとりたての地理的変異」 『沼田善子・野田尚史編 日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』 くろしお出版, pp. 123-142.
- 森脇茂秀 (1995) 「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって (一)」 『別府大学紀要』 36, pp. 14-25. 〈コーパス・データベース〉
- 国立国語研究所 (2021) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン2021.3, 中納言バージョン2.5.2) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/> (2021年6月19日確認)
- 日本古典文学大系本文データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/> (2021年6月1日確認)

2021年第3回土曜ことばの会 発表資料

本研究はJSPS科研費20K13057ならびに国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一部です。